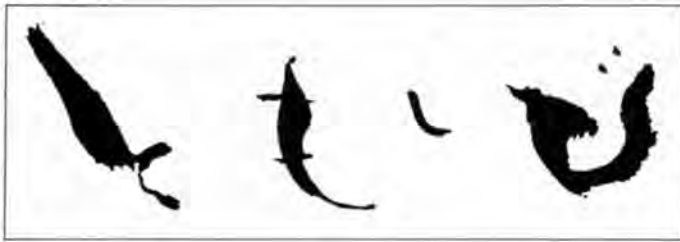


大学婦人協会東京支部

1996.7
第20号



「東京支部の

会員増強にご協力を」

東京支部長 比留間淑乃



爽やかな初夏の季節となりました。日頃は東京支部にご協力いただき支援をいただき、心より御礼申し上げます。

今回、全協会員の三分の一を占める東京支部の支部長の大役をお引受けすることになり、会員としてまだ日も浅く、正直に申して戸惑いを感じております。

昨夏は、横浜にて第二十五回 I F U W 国際会議が行われ、大きな盛り上がりを見せ、大学婦人協会の役割の重要性を再確認させられました。

今年、本部主催のセミナーと協会設立五十周年の記念事業が、併せて行われる予定と伺います。また、戦後婦人参政権が行使されてから五十周年にあたります。しかし、必ずしもまだ男女が、あらゆる政策決定、意志決定に平等に参加できているとは思えません。女性の自覚と意識の向上がなお必要とされます。

さて、会員の現況を見ますと、若

手会員が手薄い状況にあり、一方、高齢化していく現象も否めません。

会員数も減少しており、会費収入を主な財源として企画運営しております支部としても、大きな問題であります。私どもも、この事について早急に考え、努力していくつもりですが、なお一層皆様のご協力をお願い申し上げます。

先達の方々が努力され築き上げられた東京支部。私ども役員委員が知恵を出し合って、時代に即応した企画を立ててゆきたいと考えております。

皆様からも、どしどしご意見やご提案をいただきたいと思っております。

そして、講演会、講座、見学会、サークル等のご案内をいたしますので、お誘い合わせのうえ、多数のご参加をお待ち申し上げます。

昨今の日本は、想像を絶する出来事に遭遇し続け、混迷を極めておりますが、どんな世の中にあっても、会員同志豊かな心で結ばれあつていたいものです。

どうぞ会員の皆様の温かいお導きとお力添えを、心よりお願い申し上げます。



東京支部総会報告

一九九六年支部総会は四月二十日(土)国立教育会館で開催された。

支部会員数六〇五名中、出席者数五十五名、委任状提出者数二八九名で総会は成立。

松沢支部長の挨拶があつて議事に入り、事業報告、決算報告、会計監査報告が終り、一九九六年度事業計画案及び予算案が審議され、承認された。続いて新支部長、新役員が承認され、比留間新支部長の挨拶と新役員、新委員の紹介が行われた。

ついで富樫会員部委員長より、会員増加への協力依頼のお話があつた。

最後に今年度から会長になられた丸山新会長からご挨拶を頂き、ほぼ予定通りの進行であつたが、昨年国際会議が大成功を納め、これからは新たに若い会員の増加が必須でそれがこの会の活性化に繋がるとの思いでの新年度のスタートであつた。

暫時休憩の後、記念講演は元東大教授で解剖学者、養老孟司氏の「心の時代、からだの時代」、難しいが興味ある人間の脳の仕組みを拝聴した。

(関口瑞穂)

1995年度大学婦人協会東京支部決算報告

1996年度予算

1995/4/1～1996/3/31

1996/4/1～1997/3/31

収入の部

(単位：円)

(単位：円)

科目	予算額	決算額	差額	備考	予算額	備考
I 会費収入	1,500,000	1,722,000	222,000	579口分	1,500,000	¥3,000×500口
II 基本財産利息収入	90,000	66,031	-23,969		65,000	
III 運用財産利息収入	2,000	2,148	148		2,000	
IV 寄付収入	400,000	398,584	-1,416	有志・バザー寄付、参加費	400,000	有志・バザー寄付、参加費
V 雑収入	30,000	51,280	21,280	3,000×6 賛助会員還付金、入会還付金、他	30,000	400×38 賛助会員還付金、入会還付金
当期収入合計	2,022,000	2,240,043	218,043		1,997,000	
前期繰越金	1,363,507	1,363,507	0		935,196	
収入合計	3,385,507	3,603,550	218,043		2,932,196	

支出の部

科目	予算額	決算額	差額	備考	予算額	備考
I 管理費	1,180,000	1,175,002	-4,998		1,240,000	
(1) 備品費	20,000	23,484	3,484	テブラ(ラベル印刷用)	20,000	
(2) 消耗品費	120,000	130,273	10,273	コピー代、振込用紙、封筒	140,000	コピー代、文具、他
(3) 印刷製本費	50,000	38,605	-11,395	支部お知らせ、他	50,000	支部お知らせ
(4) 通信費	400,000	400,110	110	支部お知らせ、本部会報 他	400,000	支部お知らせ、本部会報
(5) 交通費	70,000	68,950	-1,050		70,000	
(6) 事務所費	100,000	100,000	0	本部へ分担金	100,000	本部へ分担金
(7) 事務手当	420,000	413,580	-6,420	事務員給料一部負担、他	460,000	事務員給料一部負担金
II 運営費	120,000	132,149	12,149		145,000	
(1) 総会費	60,000	72,194	12,194	会場費、マイク等、菓子代	85,000	会場費、マイク他、菓子代
(2) 委員会費	60,000	59,955	-45		60,000	
III 事業費	1,000,000	961,203	-38,797		700,000	
(1) 通常	650,000	615,303	-34,697	ともしび(2回)、国内奨学金、講演会他	600,000	ともしび2回、講演会他
(2) 国内奨学金	0	0	0		100,000	国内奨学金
(3) IFUW国際会議	350,000	345,900	-4,100	IFUW 資料袋、名札、他	0	
IV 子備費	20,000	0	-20,000		20,000	
V 基本金積立	300,000	400,000	100,000	貸付信託	400,000	貸付信託
当期支出合計	2,620,000	2,668,354	48,354		2,505,000	
次期繰越金	765,507	935,196	169,689		427,196	
支出合計	3,385,507	3,603,550	218,043		2,932,196	

1996年3月31日現在

基本金財政状況：基本金¥3,382,540 貸付信託 ……三井信託銀行 新宿支店
 運用財政状況：繰越金 ¥935,196 普通預金 ¥805,538 ……三井信託銀行 新宿支店
 現金 ¥129,658

会計 山村 敬子 溝渕 ひろ子

厳正に監査いたしました結果、正確に記載されており、間違いないことを証明いたします。

1996年4月11日

会計監査 金子 京子 峯川 正子

大学婦人協会東京支部
一九九六年度役員・委員名簿

支部長 比留間淑乃 (日女)
 副支部長 藤枝史子 (茶)
 書記 藤谷文子 (実)
 関口瑞穂 (実)
 百束礼子 (奈女)
 溝渕ひろ子 (聖)

会計 山村敬子 (日女)
 大島由美子 (聖)
 奥村礼子 (慶)
 小坂順子 (日女)
 坂上栄美子 (大女)
 柴崎富子 (津)
 柴田和子 (東女)
 高井敬子 (聖)
 時枝玲子 (放送大)
 中川欣子 (大女)
 中山律子 (奈女)
 縄田真紀子 (奈女)
 西尾順子 (東女)
 待場田鶴子 (大女)
 松本佳子 (茶)
 牟田 緑 (実)
 山崎邦子 (東女)
 峯川正子 (茶)
 松沢美仁子 (津)

委員 松沢美仁子 (津)
 印新役員、委員

会計監査

(五十音順) 松沢美仁子 (津) 印新役員、委員

記念講演

「心の時代、からだの時代」



講師 養老孟司氏

「人が死ぬと何になるか」いよいよ解剖の話だと思ふと緊張する。しかし、生死の境は、あの世とこの世と線を引きように単純ではないようだ。なぜ解剖がはじまったのか。「人からだを」「ことはにしよう」とするから、解剖がはじまるのである。なぜなら、ことばには「モノを切る」性質があるからである」と著書の中で述べられている。

では「心とからだ」はどんな関係にあるのか。心とは生物学で言えば脳の働きらしい。先生の脳の回転の速さは行動にも現れ、少々早口で、黒板の前を行ったり来たり、こちらも必死に目と耳を働かす。

人間は五感から入ったものをもつにまとめ、現実として認識し、自分の世界をつくりあげる。この入力に際して脳は「重みづけ」をしている。私たちは日常的にこれをする事によって、好き嫌い、すなわち感情をもつ。これが社会、文化の違いとな

り、人々の間にあつれきを生む。なるほど、世界の平和も身近な話に還元できると思つた。

入力に対し、私たちの行動は脳の働きの出力である。カマキリやハチの行動は、以前は本能といわれたが、今や遺伝子の働きとされている。

しかし、私たちは無意識のからだ、意識としての心、すべてをつなぐ言葉をもつて生きている。からだは無意識的表現を長い間かかって、型として覚えた。日本人は行動の規範として修業、道、型を大事にしてきた。

言葉（ことだま）の国として、日本は万葉集の時代から言葉を大切に生きてきた。新たな言葉と型を模索する時代が始まったのだと、私の脳もやつと回転しはじめた。

「あすればこうなる」という世のしがらみから、高遠のお花見もあきらめられ、楽しいご講演をして下さいました先生、ありがとうございます。

著書紹介

「解剖学教室へようこそ」

筑摩書房

「涼しい脳みそ」

文芸春秋社

支部各係からのメッセージ

○会員係

会員係は、本部並びに支部の会計と連絡をとりながら、新入会員、退会会員等の会員データの変更をコンピュータに入力して、会員状況を正確に把握する係です。会報等の発送のためのタックシールの印刷もします。

○講座・見学係

本年度の予定は、豊住マルシア氏の講演（五月）、女性国会議員との懇談と国会見学（六月）、セミナーのテーマに沿ったビデオ「婦選は鍵なり」の上映会（九月）、音楽会（十月）、

「夫婦別姓」についての討論会（時期未定）などで、これから逐次企画を立ててゆきます。おひとりでもご参加ください。アットホームな雰囲気です。ご提案、ご企画などありましたら、ぜひ係までお寄せください。

○サークル係

会員の交流を図るとともに、今一番の課題である会員増加に少しでもつながればという願いもこめて、新しく「楽しい俳句会」「源氏物語を読む会」も仲間入りし、サークル活動もいっそう充実してきました。サー

クル紹介の頁をご覧ください、皆様どうぞご入会ください。

（チーフ 藤枝・藤谷）

○「ともしび」係

「ともしび」は、三月と七月の年二回発行しています。内容は、支部の活動状況を詳しくお知らせすることが主なるもので、その他、十八号から四号にわたって、セミナーのテーマに沿って高等教育を社会に還元しておられる会員を、毎号一人ずつ紹介しています。今後は会員の皆様が見を自由に発表できる欄を設け、開かれた会報にしたいと考えています。

（チーフ 坂上）

○バザー係

一月の新春のつどい、四月の東京支部総会、九月の本部セミナーの折に、会場の片隅で小さな店を開いているのが、バザー係です。食べる物あり、身につける物あり、何でもありのバザーですが、頭を悩ませるのは、品物の仕入れです。このような物があるのだけれどどうかしらというような情報がありましたら、ぜひバザー係までご一報ください。

バザーの収益は、年間約十万円あり、国内奨学金などに充てています。今後ともご協力ください。

（チーフ 中川）

サークル紹介

東京支部には、次のようなサークルがあります。会場は、①以外はすべて大学婦人協会事務所です。新設のサークルは、九月から始める予定ですが、申し込み者が十人未満の場合は中止します。

① 漫歩くらぶ・英語講座・古典講座
問い合わせ先・峯川正子(電〇三一三六八四一八三〇七)

② 早蕨俳句会
日時・毎月第二火曜日
午後一時より

講師・村上光子(聖心女子大卒)「馬酔木」同人 句集「水仙花」、旅行記、えっせい等発表)
問い合わせ先・馬場八巻(電〇三三三九二一一三三三)

③ 読書会
日時・毎月第二火曜日
午後一時半～三時半
代表者・岩野鈴
問い合わせ先・山田環子(電〇三三四〇二一一一三三三)

三三四〇二一一一三三三

現在は、「雨月物語」(上田秋成)を読んでいきます。今後は「近松」物を予定しています。ひよっこのぞきに来てください。

④ 「楽しい俳句会」(新設)
日時・九月より毎月第四水曜日
午後一時半～三時半

講師・柴崎富子(現東京支部委員 津田塾卒 俳歴二十五年 俳人 協会会員 「春燈」同人 句集「山日和」 読売カルチャ―新宿講師)
申し込み先・海老原典子(電・F〇三三三三五一五〇五六)
初心者向き 定員二十名

⑤ 「源氏物語を読む会」(新設)
日時・九月より毎月第三第四水曜日
午前十時半～十二時半

講師・坂上栄美子(現東京支部委員 大阪女子大卒 源氏物語講師 歴十五年)
申し込み先・平田宏子(電〇四七一四三一一五七三三)
初心者向き 定員二十名

十年の予定でじっくり原文を読んでいきたい。源氏物語の舞台を訪ねる旅も企画予定。

見学

「女性国會議員との懇談と国会見学」



本年度本部セミナーのテーマ「デインジョン・メーカーキングへの女性の参画」にもとづき、東京支部では六月三日(月)午後一時三十分より三時三十分まで女性国會議員との懇談及び国会見学の機会を持った。

まず一時三十分より一時間、参議院議員会館第一会議室で、あべ幸代・大脇雅子・岡崎トミ子・日下部禰代子・栗原君子・山東昭子・千葉景子・森山真弓・山崎順子(円より子)の九氏(アイウエオ順)との懇談は「女性の政治参加の現状と、突き当たっている壁」をテーマとした。

暮らしと政治を密着させるために、女性が政治的意志決定の場へ一人でも多く進出し(あべ氏)、法案を議会へ提出する道筋のつけ方を学び、単

なる賛成、反対ではすまされず、最低30%の女性議員を(大脇氏)とのこと。サッチャーさんが首相になれたのは男性の支持があったからこそと、議員生活十九年の山東氏の説である。また、同じような顔ぶれの議員の審議会のかけ持ちへの反省もあった。女性の政治参加の層を厚くするため、クォーター制度の導入を進める必要性は大きく(千葉氏)、とかく男性中心になりがちの政治の世界に、両性平等委員会を持ちたい(岡崎氏)。「女性のための政治スクール」を作り、政治へのチェック能力を持つ女性を育てる必要がある(山崎氏)。「理屈はともかく数があると言う政治の世界に女性が増えることが一番」の森山氏の説は、今の政治世界の真理と思う。

出席者五十名の中から民法改正法案が今国会に提出されないことへの質問が出たが、各党それぞれの立場、意見があるらしく確答は得られず。

この後、衛生の丁寧な案内で議事堂を見学。日本の政策の全てがこの中だと、感慨深いものがあつた。それにしても、「枕詞」のような「女性のための」が政治の世界に不必要になる日は本当に来るのだろうか。

(柴崎富子)

講演二題

「北京女性会議について」

(東京・神奈川支部共催)

講師 有馬真喜子氏

講師 房野 桂氏

冬にしてはふんわりと暖かく、春の近いことを感じながら渋谷駅から歩いた私は、汗ばむくらいだった。会場は、新しい東京ウイメンズプラザの二階で、白い壁に午後の日差しが明るく反射していた。



定刻ちよつと過ぎから始まった講演は、まず房野氏が壇上に登られた。氏は、会議の開始日から最終日までを、あらかじめ私たちに渡されていた五枚の資料のうちの会場の見取図を随時示しながら、逐次歯切れのよい口調で述べられた。会議に出席しなかった誰もが、あたかも出席していたかのような錯覚をするほど視覚にも訴え、また各会場でのテーマ、議長の状態、会議の運び具合、その場の雰囲気、具体的に生き生きとユーモアたっぷりに語られ、その時の熱気が伝わってくるようだった。



有馬氏は、政府間会議に焦点を絞って話された。氏は、二十年前の第一回世界女性会議からずっと関わってこられた。その開会式で、当時の国連事務総長ワルト・ハイム氏が「女性差別ほど大がかりな差別はない。なぜなら人口の半分は女性なのだから」と女性問題イコール差別問題であることを明確にした。それ以来あらゆる女性差別問題が議題となり、論じられてきた。東西問題がなくなった北京会議では、議論が政府間問題で暗礁に乗り上げることにはなくなったが、宗教、民族、文化、伝統が、深くこれに関わってきたという。

日本では、女性問題そのものの位置づけが低いことも、氏の述べられたところだ。これを引き上げるのは、女性自身の意識改革以外にはないわけだ。

思うに、女性問題は同時に男性問題であるはずだから、いずれは、男性も含めた差別問題の討議の場が必要になってくるのではないか。

(石山純子)

「ブラジルと日本の教育の違い」

講師 豊住マルシア氏

現在、神奈川における多文化共生社会をめざして、通訳翻訳ボランティアをはじめ、外国人の日本での生活を支援するための運動等の活躍をされている豊住マルシア氏をお迎えし、「ブラジルと日本の教育の違い」と題したご講演を拝聴した。



氏はブラジルのサンパウロ州に育った日系三世で、二十歳までブラジルで過ごし障害者教育に携わってこられた。その後日本に留学、ブラジル大使館勤務、日本人との結婚、出産、育児を通して、ブラジルで培ってきた文化や教育と、日本で受けたそれとの違いに直面し苦悩するなかで、今のボランティアに着手するに至った経緯をお話し下さった。

氏が来日した当初はごくわずかだった南米、東南アジア、日系ブラジル人が、今日では飛躍的に増加している。来日した異文化を持った彼等が抱える問題は多く、女性に関わっ

ていく地域社会や教育に関しては特に多い。氏は言葉、習慣の違いが壁になって職場、医療、教育などの現場で困惑する人々のために、現在地域社会で実践しておられる通訳翻訳ボランティアや学習支援ボランティア等の生活支援の状況について語られた。さらに、外国人の日本文化への適応を助けるために出版した「英語でクッキング」「ポルトガル語でクッキング」の著書や種々のハンドブック等の印刷物を会場で回覧して下さった。

また、昨年は北京女性会議の女性の自立に関するワークショップに参加し、貧困や発展など社会的な環境の違いはあっても、どの国の女性もみな共通の悩みを抱えていることを知り、おおいに感激して帰国されたとの感想を熱く語られた。また、日本人は国際舞台での印象が薄いので、もっと積極的に自己アピールをするようにとのご忠告を頂いた。

最後に、講演会参加者の中から今日のブラジルの社会問題、NGO活動、男女の雇用の状況などについて活発な質疑が行われ、小柄な身体ながら漲るパワーは大きい氏の一層のご活躍を期待するなか、二時間の有意義な講演会が過ぎた。(牟田 緑)

「高等教育と女性」
—その社会的還元シリーズ③—

中村久瑠美さん

連休明けの爽やかな午後、南青山のオフィスに、弁護士中村久瑠美さんを訪ねた。緑の庭に面した部屋にはいくつも絵が飾られ、フアッシュショナルな中村さんのお話を伺っているうちに、そこが法律事務所であることを忘れてしまう。

中村さんは、お茶大附属高校から、昭和三十九年に東大文科一類に入學。後、文学部(美術史学科)に転部。大学院修士課程終了。



それまで超エリートであるが社会的に目覚めていなかった中村さんに、転機が訪れた。修士一年目に結婚した法律家の夫君を通して、実学としての法律に改めて興味を持ち家事のかたわら勉強を始めるが、同時に女性の個としてのアイデンティティは

否定され、有能な主婦であることのみが求められる結婚生活に絶望し、

子供が生まれて半年目に離婚。子育てしながら、法学部に戻って司法試験に挑み、一年半で合格(三十才で司法研修所に入る。ワシントンDCで国際比較法の研究などをした後、青山に法律事務所を構え現在に至る。エレガントな外見からは想像できない芯の強さを垣間見た。主として民事を扱い、「人生の最も厳しい時を依頼者と共有していく」ことに、生き甲斐を感じるという。講演も多い。老いていく親の世話や子育てをしながらの女性の仕事は、家族の無事が大前提であり、「明日は何が起こるか分からない。今できる事を今のうちにする」女性の生き方、そして、闘争的ではなく、「柔よく剛を制す」がポリシーとのこと。

JAUWには十五年ほど前に入会し、セミナーではチーフもつとめた。現在超多忙の中、国際第二委員長としても活躍。「大学婦人協会は、もつと使命感を持って高学歴女性の社会的還元などを強く打ち出し、ガッツで若い人をふやしていかなければ」と強調される。皆、同じ思いにうなづく。いま話題の「夫婦別姓」に話が及び、一同大いに盛り上がった。ここ

で耳よりな話。

東京支部が企画すれば、東京弁護士会女性の権利委員会のメンバーでもある中村さんは、喜んでデイスカッションに参加してくださるとのこと。高学歴女性の、率直で具体的な意見を聞きたいとおっしゃる。様々な立場から「夫婦別姓」を捉え、「改姓の時期」や「子の氏の定め方」等についても具体的な要望を出し、中村さんを通して立法に反映していきたくらすればいいではありませんか。早い時期に、ぜひ実現しましょう。

「法律は、人生の集大成、人類の文化遺産。長い年月調整しながら人生のエッセンスを一文に表したものの。無味乾燥に見える六法全書もその背後には、人間のうめき、叫びが聞こえ、大変に奥が深い。人間の叡智が、それをどう判断し運用していくかが問題」と心をこめて語られたのが印象的。法を深く愛し、学び、その運用に心をくだいておられる日常が言葉にあふれ、感動した。女性の職業について、「一般職よりは専門職の方が継続しやすい。弁護士などはこれから開拓していける分野」とのこと。ここで、中村さんのスーパーウーマンぶりをもう一つご披露したい。中村さんはこの四月から、東大

学院の博士課程で、学生時代修士課程まで終了した美術史の勉強を始めた。かつて実学としての法律に興味を持ち、人生の転機を乗り越えてさらに深く法律に関わってきた中村さんは、いま美術史研究の新しい分野開拓に意欲を燃やしている。「日々の生活に密着している法律を通して見た芸術や文学の世界」—それは机上の学問ではなく、彼女がライフワークとして目指す「法と常識とエロス」に通じる血の通った研究にちがいない。お子さんも、ことし東大博士課程に進まれたとのこと。にこやかに語る中村さんは、本当に若々しく美しかった。

楽しくお話を伺っているうちに、あつという間に時は過ぎた。第一印象とは異なる波瀾に富んだ人生。子育てしながら法律に明け暮れた日々の時間との戦いはいかばかりか。それは、仕事に勉強に活動に、意欲的に取り組んでおられる現在も変わるまいが、明晰な頭脳で現状を正しく捉え、「今自分ができる事」に果敢に挑戦してきた中村さんは、いま過去の全てを吸収して、艶やかに輝いて見えた。正にスマートな女性。中村さんを開んでの座談会の実現を話し合いながら、心豊かに帰途についた。

第39回通常総会に出席して

前副支部長 鈴木光子

四月三日つくば第一ホテルで開催される全国総会へ出席のため東京駅からバスに乗る。久しぶりのつくば市はまるでアメリカだ。ビルが立ち並び、広い道を車が勢いよく行き交い、歩いている人はほとんどいない。総会に先立つ二日夜の懇親会には県知事もご出席、華やかな雰囲気の中で美味なるご馳走に、茨城支部の方々のご苦勞を思い感謝する。

翌日の総会には東京支部から六十余名参加。逝去会員のご冥福を祈って黙禱の後、青木会長を議長に議事は進む。昨年の国際会議の報告に、暑い最中に無我夢中で働いたあの一週間のなつかしく思い出す。今年任期満了の理事が多く、大仕事を終えられた会長始め多くの理事が交替。退任理事の紹介をされる会長の思いも一入と感じられた。

印象的だったのは、若手リーター勝又幸子様がインターネットを通じての参加を呼びかけられたこと。若い会員の頼もしさを感じさせられた。



茨城支部主催見学会

筑波路・結城の里へ

四月二日、まだ桜も蕾の学園都市つくばを出発。万葉の昔から東歌にも詠まれ、人々に親しまれてきた筑波山が男体、女体の双峰をみせて聳える北関東の広大な平野をバスは走り、やがて茨城自然博物館に到着。

世界最大という松花江マンモスの複製を見上げながら講堂へ。中川志郎館長より、子供たちに壊されることを恐れず「見て、聞いて、触れる」といった体験を通して、長い時間をかけて大自然が作り上げてきたものを理解させる一方、菅生沼対岸の宿泊施設「あすなろの里」まで含めた野外施設をも一体にした活動体験により、豊かな感性を養う二十一世紀型自然博物館として、平成六年に開館との説明があった。正面の幕が上がる目下には豊かな自然を残す菅生沼の景色が拡がり、一同思わず嘆声を上げる。

順路に従って見学、春休みのこととて大勢の親子が訪れ楽しんでいる。三葉虫、アンモナイトや床に埋め込まれた大きな化石、さまざまな鉱物、恐竜の骨、「隕石を持ち上げてみよう」に挑戦、その重さを実感。茨城の自

然他の展示を見、冬季白鳥も飛来するとう菅生沼へ下りる。鶯が囀り、そこそこに鴨が群れ浮かぶ。

昼食の後、結城の里結織苑（ゆうしきえん）へ向かう。

古代の緋（あしぎぬ）丹敷（にしき）に始まり今に伝わる結城紬の数々と歴史資料の展示、いざり機による実演を見る。良質の繭を指先で広げて袋状にする真綿かけから糸つむぎ、拵（こ）くり、染め、織りと重要無形文化財指定をうけた気の遠くなるような手技、三十二もの工程を経て織り上げられる結城紬のすべてをビデオで見た後さやかな土産を手に、ご案内くださった茨城支部の方々に感謝しながら小山駅で解散。久し振りに会った各支部から参加の友人たちとも再会を約し、帰途についた。

（斉藤智恵）



早蕨俳句会会員近詠

村上光子

野あやめは指貫のいろ業平忌

池森昭子

初春の舞台せましととんぼ切る

大竹泰子

一人静凜と生きたし母のごと

木下二三子

秋しくれ来て小鼓の乱調子

佐藤千鶴子

空仰ぎ終の息吐く落椿

坂上節子

蟻が軒海の色ひく針魚干す

馬場八巻

心足る一日の帰路や鱗雲

山口晃子

白樺の芽吹く御堂やルオーの囃

山田理子

亀鳴くや男もすなる耳飾り

鷺崎ヨウ子

五月来る少年像に小鳥のせ

はじめまして

「今年度からの新委員です。どうぞよろしく」

溝渕様のご紹介で四月から参加させていただきました。会員の皆様の前向きでハツラツとしたお姿に魅了されております。お教えを頂きながら少しでもお役に立てばと存じます。

大島由美子(聖)

昨年の国際会議のご縁で東京支部のお手伝いをさせていただくことになりました。新しい出会いと体験に期待と不安が半々ですが、少しでも皆様のお役に立てれば幸いです。

奥村礼子(慶)

長い間の主婦がこのような会の仕事ができるかどうか不安ですが、新しい生きがいを見つけたつもりでがんばりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

小坂順子(日女)

専業主婦ですが、家族の世話(子どもと寝たきり老人)から解放されたこと二十年間は、染色(型染)を学んで服地などを染めて展覧会をすることと、古典文学講読を楽しんでいます。

柴田和子(東女)

ともしび二〇号 発行日

一九九六年七月一日

発行 大学婦人協会東京支部

ともしび編集係

〒140 新宿区新宿七十七番八戸山マンション二四一号 Tel〇三三三〇二〇五七二 印刷 タナカ印刷

「教養と学問は別のもの」とよく言われます。けれど、呼応するものは無限大と思います。五十の坂を下りつつ昨年四年制を終えました。よきお人にお目にかかる機会を人生の最高の幸せとしている私です。よろしく。

時枝玲子(放送大)

福岡県生まれ、大阪育ち、埼玉在住。趣味はハイキング、山登り、音楽鑑賞。英会話と紅型染の教室に通い、華道と数学を教え、図書館で対面朗読と布の絵本拡大本などの製作のボランティア活動をしています。

いつまでも好奇心旺盛です。よろしく。

中川欣子(大女)

大学卒業後、商社会社に一年勤務、結婚後は夫の転勤により各地での生活を体験。二人の娘は既に結婚。今後はJAUWを通じて、特に若い方々のために、何かお役に立てることがあれば良いと願っております。

山崎邦子(東女)

初めて大学婦人協会の活動に関与することになりました。大先輩の業績を学び、支部委員さんとの交流から得た教訓を、今後の女子教育に生かしていけたらと期待しております。

牟田緑(実・茶院)

事業報告・予定

4月20日 東京支部総会

於国立教育会館

5月15日 講演「日本とブラジルの教育の違い」

講師 豊住マルシア氏

6月3日 女性国会議員との懇談と国会見学

7月1日 「ともしび」第20号発行

7月3日 バスツアー(財務主催)

栗田美術館他

9月11日 ビデオ上映会「婦選は鍵なり」—女性参政50周年記念ビデオ

9月28日 JAUW50周年記念パーティー

9月29日 於京王プラザホテル新宿 JAUWセミナー

テーマ「高等教育と世界の女性—テイシジョン・メイキングへの参画にむけて」(本部主催)

10月 於ストラテグ新宿 パンフルート演奏会

11月16日 観劇—新橋演舞場(財務主催)

1月 新春のつどい(本部主催)

お知らせ

昨年八月の国際会議の記録として、本部と東京支部とで二種類のアルバムを作りました。事務所の東京支部の戸棚に置いてあります。自由にご覧ください。

編集後記

古代においては、東シナ海や日本海を挟んで西日本と朝鮮半島と中国大陸とは一つの文化圏であったという。

二〇〇二年のサッカーのワールドカップの日韓共同開催も、古代の人々の海を囲んだ交流のように、韓国と西日本とで協力しあって開催してはどうだろう。北朝鮮も加わったらどんなにすばらしいだろう。

直接距離にすると、福岡—ソウルは福岡—京都でしかない。福岡—ピョンヤンでも東京より近い。(S) 最近の世相を考えると、住専問題を初めとして腹が立つことが多くてやりきれない。立てた腹は横になるいとまがない。私たち女性の問題も山積しているが、その上に大きくおおいかぶさっている世の中の理不尽、矛盾の方に、先に目がむけられ、女性問題は直視されず、霧の中でうごめいているようなもどかしさを感じているのは私だけだろうか。(N)

